２０２０年度

地球環境『自然学』講座

第 10 回

テーマ

ふるさと創生：遠野市・住田町からの発信

講　師

ふるさと創生大学

運営委員　藤井 洋治 先生

2021 年 2 月 27 日

認定NPO法人･シニア自然大学校

講師プロフィール

藤井 洋治（ふじい　ようじ）

１．経歴

　１９４９（昭和２４）年、岩手県住田町に生まれ、五葉小中学校で遊びながら学ぶ。
遠野農業高校農業科を卒業後、同校で実習助手として１５年間勤務する。この間に、通信教育で日本大学法学部政治経済学科と同大経済学部経済学科を卒業。

　その傍ら、農業実習の教員免許取得のため、岩手大・秋田大・弘前大で単位を取得後、農業教員となる。県内の花巻・一関（２回)・盛岡（２回）の農業高校等で教諭・教頭・副校長を務め、遠野緑峰高校と名前が変わった母校で、校長として定年を迎える。

　その後、遠野市の地域活性化アドバイザーとして、農家支援室と遠野早池峰ふるさと学校で６年間勤務する。

　現在は、住田町の里山にある自宅で、源流の水をふんだんに使い農業を営んでいる。

２．現職

ふるさと創生大学（文化政策・まちづくり学校）運営委員
住田町　五葉地区公民館　館長
住田町　五葉地域づくり委員会　会長

３．著書

藤井洋治（2015）
　遠野早池峰ふるさと学校のはじまりー地域社会の未来をひらく『遠野・京都二都をつなぐ物語』(水曜社)
藤井洋治・池上惇（2017）
　『遠野拓心全人教育の実践―ふるさとを蘇生させる遠野市民教師からのメッセージ』
　　（国際文化政策研究教育学会）
藤井洋治（2019)『遠野から住田への道』　（東海新報）
藤井洋治（2020)『遠野早池峰ふるさと学校からふるさと創生大学への歩み』(月間社会教育)
藤井洋治（2020）　『ふるさと創生大学って何だろう？』(東海新報)
藤井洋治（2021）　『三都物語 in 遠野・住田　私の遠野物語』(三都物語）８月発刊予定

20212.27 地球環境『自然学』講座レジュメ

ふるさと創生：遠野市・住田町からの発信

ふるさと創生大学運営委員　藤井洋治

はじめに　―「川でつながる森と海」―

私は、幼少期から山と川に入りびたり、それが小学校入学後も続いた。宿題をやった記憶が少なく、５～６年の時に将来を心配された。それでも、全校で 200 名ほどの小中一緒の小さな学校は、私を受け入れてくれ、私の成長を支えてくれた。

私の四季感覚は、裏山のカタクリで春を知り、ヤマブキの花が、カジカの産卵を告げた。向いの山にアツモリソウが咲くと初夏で、それを皮切りにハヤ、イワナ､ヤマメ、ウナギの躍動が始まった。秋は、栗拾いやキノコ採りで忙しく過ぎ、やがて雪が舞い始める頃には、ヤマドリやキジが里に下り、一面が真っ白になるとウサギを追う冬が来た。このような自然を全身で味わえた私は、幸せであった。

ところが、この環境が徐々に変化した。山からアツモリソウが姿を消し、それに代わるように、鹿や猿が増え、クマの目撃者も増えてきた。川が黒くなる程いたカジカも、ウナギやハヤもいなくなって久しい。

しかし、この現象は、里山だけの問題ではなかった。私が、一関に赴任した頃、畠山重篤氏が主宰する「森は海の恋人」の植林が始まった。私は、1993 年に一関農業高校の生徒を引率して、この植林に参加し、初めて森と海のつながりを知った。植林という、目からうろこの体験を経て、私の育った山や川を取り戻すヒントをいただいた。その最大のポイントは、体験を通して人の意識を変えることであった。

あれから２５年が経つ。私は今こそ「川でつながる森と海」を合言葉に、文化と自然資本を活かすふるさと創生の道を、遠野市と住田町を舞台に考えていきたい。

Ⅰ　遠野市からの発信

遠野早池峰ふるさと学校

（旧大出小中学校）

１　廃校を活用した「遠野早池峰ふるさと学校」

私の教員生活は、遠野・花巻・一関と盛岡を経て遠野で終着した。退職後、私は遠野市から「地域活性化アドバイザー」という役職で、廃校の運営を依頼された。

実は、私自身が五葉小中学校という過疎地の学校を卒業していたことから、廃校の利活用に関心があった。それと遠野は、私の第ニのふるさとであり、住田と共に長年温めた「ふるさと創生」の思いを実現する最適の場所であった。

「遠野早池峰ふるさと学校」（以下、ふるさと学校）は、2010 年度に、旧大出小中学校が生まれ代わってできた。大出小中学校は、1200 年の歴史がある早池峰神社に隣接し、岩手の名峰早池峰山のふもとにあった。かつて、この学校には多い時で８５名の児童生徒がいたが、2007 年度には３名だけとなり、閉校した。

その後、遠野市と地元住民が２年間協議した末、都市と農村を結ぶ拠点として誕生したのが「ふるさと学校」である。住民からは「こんな奥地に来る人は誰もいない」との声が多く、この学校の運営を担う人が出てこなかったという。結局、私と管理人１名、予約時の食堂員２名でスタートした。

私は、ふるさと学校開校以後、五葉山ろくの自宅から早池峰山ろくまでを６年間通ったが、その２年目に、東日本大震災に遭遇した。学校のある地区には７０戸程の民家があるが、高齢者や１人暮らしの方が多く、震災の夕方から近隣住民２２名がふるさと学校に集まり一晩を過ごした。

２　遠野早池峰ふるさと学校から「ふるさと創生大学」へ

震災後、私は燃料の不安もあり、しばらくは遠野市内で支援活動に参加した。やがて、落ち着いた頃にふるさと学校に行くと、産直名物の山菜やキノコが放射能の影響でまったく販売できないことを知らされた。ふるさと学校のスタッフ３名は、地域住民と被災地に出向き、差し入れ等の活動にあたっていた。

震災後は、ふるさと学校への来校者が途絶えたが、しばらくすると遠野市を訪れた震災のボランティアに休憩場所として利用されはじめた。学校の静けさや古風な神社が口コミで広がり、徐々に客足が伸び、産直や食堂の利用者も増えた。

新たな商品として、遠野緑峰高校の生徒達が発見した「早池峰菜」を、地元住民と高校生が一緒になり、ふるさと学校で栽培し始めた。また、住民の民芸品や「早池峰蜂蜜」を出品してもらうと、好評であった。さらに、来校者に学校の活用法を提案してもらうと、思わぬ催しが生まれた。

雑巾がけレース・写真展・絆の演芸会・雪合戦大会・わら細工・小中の遠足・剣道の合宿・高校登山大会・高校地元学・観光カリスマ塾・子ども会・ＰＴＡ行事・大学の研修会・教員研修・ＪＩＣＡ海外研修生受け入れ等も行われた。遠野市と友好都市の武蔵野市と大府市からは、ゴムボートと川遊びを受け入れた。

この様子は、全国紙の「廃校　新たな活路」で紹介された。これに加えて、ふるさと学校での結婚披露宴がテレビ放映されると、来場者は全国に及び、開校４年後には年間来場者が５千名を超えた。

左上：校舎雑巾がけレース

左下：雪合戦

右上：絆の演芸会

一方、私は、遠野市ユネスコ協会に所属していた関係で、ＥＳＤ専門部長として市内の小中の出前授業を担当していた。市内には、小学校１１校と中学校が３校あり、毎年川の水質調査を継続している学校もあった。授業は、年間３・４校を回り、身近な生活や環境について、「水とゴミ」「川・海のつながり」「地球と食べ物」などをテーマに学習した。５年で１周し終えた。

この頃、京都から遠野に通い、震災後のふるさと学校に注目されていた方がおられた。池上惇京都大学名誉教授である。2015 年に「遠野の未来づくりカレッジ」で行われた池上先生の講演会で、ふるさと学校が紹介されたのである。講演会終了後、先生にお会いした私は、全国に大学をつくりたいと言う先生の構想に感銘し、月１度のペースで先生が遠野を訪れた際、遠野の各地をご案内させていただいたが、遠野では、学校の適地にたどり着くことができなかった。

Ⅱ　住田町からの発信

１　震災がもたらした学びの場

私の地元、住田町五葉地区でも、震災を機に大きな変化があった。県南の高峰五葉山のふもとにあった五葉小中学校は、現在は住田町の五葉地区公民館となっている。五葉地区公民館には、NPO 法人いわて GINGA－NET が全国の大学に呼びかけて、大学生や大学の先生が集結した。最初は、１３大学から５１０名の学生が交代で訪れたという。この数は、地域住民を大きく上回り、完成後間もない公民館がいっぱいになり、体育館で３００名程が寝泊りした。

学生ボランティアが、ここを拠点としたのは、被災地の陸前高田市と大船渡市、釜石市と大槌町が、ほぼ等距離であること、津波の心配がない地で、高速道の滝観洞インターが近いから、とのことであった。

私は、住民と学生とのパイプ役となり、学生達には住民との交流会を呼びかけ、住民には「ボランティアのボランティアをしませんか」と提案した。そして、多くの学生が初めて住田町に来たと聞き、暑い時期には住民手作りの川床をしつらえ、地元の食材でもてなした。中には、何度もボランティアに来るリピーターの学生もいたので、毎年交流会の趣向を変えるようにした。

私は、震災後に五葉地区公民館が大学関係者であふれ返る光景を目の当たりにして、山間の地に大学のキャンパスができたような錯覚を覚えた。GINGA-NET によると、五葉地区公民館を訪れたボランティアの学生は、延べ１万７千名になるという。ちなみにその数は、住田町の人口の３倍にもなる。仮に、この地域に大学ができれば、どんな変化が起きるだろうか、と夢のような思いを巡らせた。

上：大学生ボランティアと住民の交流会

右：多くの大学生ボランティアでいっぱいの公民館

２　ふるさと創生への道

東日本大震災は、わが国の歴史に残る巨大な災害で不幸な出来事であった。その一方で、かつてなかった全国的な規模で、人々の大移動がもたらされた。この人の移動を、震災からの学びの場に転換したのが、京都大学名誉教授の池上惇先生である。先生は、岩手の辺境の地ともいえる住田町の五葉地区に、一軒の古民家を改修して学舎（がくしゃ）と呼ばれる学びの場をつくられた。

ここは、人口３００名程の山村で、９つの集落が気仙川源流沿いに点在する。大イワナやイヌワシの生息域でもあるこの地は、五葉小中学校ができるまでは、１時間以上かけて通学を余儀なくされた地域である。ある日、住田町で文化庁の講演会があり、その機に先生を住田町にお連れした際、「住田には外からの人を受け入れる素地がある」との感想を述べられた。それから間もなく、先生は３度目の住田町訪問で、念願の学舎候補地に辿り着かれた。その当時の思いを先生のデータベース（Ikegami，Jun©2020）から以下にご紹介させていただく。

藤井先生とわたくしは、「ふるさと学校を発展させ、各地にふるさと創生大学を作る活動」を、遠野市の隣町、岩手県気仙郡住田町で開始した。池上は、通信制の大学院大学を創生しようとして、（中略）全国各地の過疎地に学舎をつくり、それを、巡回しながら「通信制と対面教育の結合」を実現しようとしていたからである。京都府下をはじめ、各地に適地を求めていたが容易には発見できなかった。

ところが、藤井先生が「わたくしの家の川向うで古い農家の建物が売りに出ています」と、知らせてくださったのである。わたくしは、一見して、学舎か、図書館にふさわしいものと判断した。価格も合理的であった。震災復興支援活動は、地区公民館という「場」の活用を通じて、地区住民とボランティア学生との交流の場を生み出し、その「場」は、地区住民による「おもてなし」を媒介として、住田町の魅力を全国に発信する機会を生み出した。

これは、地区住民にとっても、ボランティア学生たちにとっても、貴重な「学びあい」が進む地域を創りだした。互いが主体的に、かつ、積極的に、教育や学習に参加しあう状況が生み出されたのである。そして、このような機会や、教育・学習の機会こそ、人口減少の最中にある地区住民にとって、自立した人格が対等に会話しながら、地域再生の機会と希望を生み出すものでもあった。

３　「ふるさと創生大学」のはじまり

2018 年 5 月 3 日五葉地区公民館で、文化政策・まちづくり学校：略称「ふるさと創生大（以下創生大）の開校式・入学式・祝賀会が挙行された。式では、学長の池上惇京都大学名誉教授の式辞と来賓の住田町長の祝辞、来賓講師等２０名が紹介された。続く入学式では、出席者３０名と、京都市民大学院の先生方１０名の紹介があった。式が終了すると、住民と共に７０名程が参加して、手作りの祝賀会が開催された。

翌日は、地元五葉山火縄銃鉄砲隊による歓迎演武と住田町の案内があり、３日目には「震災まちづくり学」のシンポジアムが大船渡市で開催された。その後は五葉地区公民館で、毎月２日「文化資本の経営」の講座が開かれた。

また、年に１度は、京大で開催される「文化資本の経営」のシンポジアムに京都市民大学院、高山のふるさと学校の方々と共に、参加させていただいている。

創生大では「学びあい育ちあい」をモットーに、受講者にも講師になっていただく。学舎ができるまでは、住田町の学舎や五葉地区公民館、住田町役場町民ホール、大船渡のリアスホールや防災観光交流センター、遠野市の素づくり亭、遠野緑峰高校同窓会館等で行われてきた。

2019 年 2 月 17 日には、古民家を改修した学舎が誕生した。学舎で内覧会が行われ、早池峰神楽が舞われた。さらに、遠野を舞台にした国際映画祭グランプリ映画「オシラカガミ」の上映や、陸前高田市民のコーラスでお祝いをしていただいた。

左上：ふるさと創生大学学舎（中央の建物）

左下：大学校舎庭での「さなぶり」（注）

右上：早池峰神社神楽舞

（注）さなぶり（早苗饗）とは、田植え初めに田の神を迎える行事「早降（さおり）」に対するもので、田植えが終わって田の神を送る行事、または、そのときに行う飲食の行事。

この学舎は、住田町の土倉という１８戸の集落内にあるが、住民との提携で災害時の避難所や集会所にもなっている。庭では、住民の「さなぶり」も行われる。2020 年度は、月２～３日行われる講座をすべて開放講座とし、田植え・稲刈り・川遊び等の体験講座は、世代間交流ができるようにした。１日目の午前中は、書道講座を開講し、地元の小中から８０代まで参加するようになっている。また、地元のご協力で１５ａの畑と１０ａの水田を貸してもらい、収穫した野菜やコメは、縁側を使い「えんがわ産直」として、地元の農産物等と一緒に直売をしている。コロナ禍の中では、難しいが「えんがわカフェ」やご高齢の方々の休憩場所も入口の正面奥にある。どなたでも、気兼ねなく利用できる設計である。また、創生大の図書コーナーには、２００冊の幼児本をそろえており、自由に利用できるが、今後の図書選定はこれからの予定である。

４　文化資本の学び舎から

住田町五葉地区を拠点に、多様な学習機会を創出する創生大は、開講３年目を迎えた。今年度は、コロナ禍の中で、リモート講座が行われてきた。そればかりではなく、受講者が先生になる「学びあい育ちあい」の学習は健全である。これから、参加者の希望でみそ作りも行う。他に、地元の方々からザルやカゴ作りも習いたいという希望者も多いが、今後のコロナの状況を判断して対処するしかないが……。

私からは、子ども達と一緒に、老いも若きも「川で手づかみ体験」を提案している。創生大の行事ではまだやっていないが、学舎の前の川では、何度か幼児から大人までが体験し、一度やってみるとリピーターになることが多い。実は、池上先生も長靴に麦わら帽子のいでたちで、満面の笑みで川遊びをされたことがある。

気仙川の源流部とはいえ、浅い所は幼児でも遊べ、深い所でも膝上程度で、危険度が少なく、親子連れや女性にも手ごろの川遊びができる。イワナやヤマメに混じって、最近カジカが増えてきた。私の夢が少しかなって嬉しいが、この背景には、川の魅力を伝えようと、住田町の補助をいただき、川床遊びを行ってきた効果が出始めたのではないか、と感じる。この場所は、アユのいる中流域で開催してきた。

子どもたちには、最初は池の中でアユのつかみ取りをしてもらい、塩焼きで食べた後は、大人が川の周囲で監視する中、自由に川遊びを楽しむものである。

大イワナのいる気仙川源流の地で川遊び

一方、創生大の受講生からは、壮大な提案をされている。過日、学舎の後ろから山に続く「哲学の道」を歩きながら、アツモリソウを蘇らせることができないか、との話題が出た。私が、この道を行くと、昔アツモリソウが一面にあった場所に着くと話したからである。熱心に提案してくれるのは、「海から来た男」達だった。地元の方に相談すると、「花咲か爺の会」でも作るか！と前向きな話題になった。

創生大の受講者は、体験からの学びあいで海の民が里山を思い、里山の民が海を思う、正に心のかけ橋がつながってきた、と実感した瞬間であった。

私は、遠野でも森と海のつながりの深さを実感してきた。早池峰神社の本殿の軒下には、三陸の海に生きる人々の古い時代からの祈りの痕跡が、相当数ある。

早池峰神社には、釜石や大槌をはじめ、三陸沿岸からの参拝者が多い。神社の神殿には、大漁旗が奉納されている。私は、震災後ふるさと学校で、劇的な出会いを目撃した。離散した友人が、「早池峰神社のお陰だ！」と手をとり合って泣いた。

五葉山もそうだが、山は漁師の命の目印となる。それを痛感したのは、創生大の講座で、錚々（そうそう）たる「海の男」達が、海から見た五葉山を語ったからである。

気仙沼のＡ氏は、９年連続サケマス漁獲高日本一の漁労長・船長経験者の８０代。Ｂ氏は唐桑の現役の漁師、Ｃ氏は陸前高田市で、大型客船の水先案内人、Ｄ氏は震災時に南極付近にいた通

信士で、共に７０代である。この４名は、海でお世話になったお礼にと、五葉山登山をした際に、奇しくも出会われたそうである。Ａ氏は「ここ住田は、自分を温かく迎えてくれる気がする」と語る。Ａ氏の講話を聴講した受講者からは、Ａ氏のために『港へ帰ろう』という曲を作り、贈られた。

創生大研究棟で、環境省関係者が開催したイヌワシ調査の研修会→

むすびに代えて　―ふるさと創生大学って何だろう？―

何度も同じことを聞かれる。「ふるさと創生大学って何なの？」と。そのたびに私は「メダカの学校です」と答えている。すると、ほとんどの方が、「何それ！？」と無言で私の顔を見返す。　私は「誰が生徒か先生か……のとうり、受講者も先生になるのがこの学校です」と話すので、質問者が混乱する。

最初に「この学校のモットーは、学びあい育ちあいです。」と言われたのは、創生大の学長で、京都大学名誉教授の池上惇先生である。

「ふるさと創生大学」は、一般社団法人「文化政策・まちづくり学校」の略称で、まだ学校教育法上の大学ではない。正式には、文部科学省に大学の認可を申請中の学校である。こんな説明をすると、その大学はどこにあるのかと尋ねられる。

そして、「あんな山の中に大学はないだろう」と言われる。「民家を改修して『学舎』としたものです」と説明すると納得される。学舎は、築１００年は経つ建物で、初めて見る方は、寺子屋か藩校を連想するのではないだろうか。

学舎の設計は、京都市民大学院講師の広瀬滋氏である。広瀬氏は、池上先生から気仙大工の技が紹介できるようにとの依頼を受け、自然石の土台や土壁を露出させた回廊を造られた他、地区住民が公民館のように利用できる交流の場を造り、学校への移行が自然にできるようにされている。

現在は、いつでも誰でも入れる「フリースクール」のような建物である。受講者の中には保育園・小学校・高校の先生や現職の介護職員、看護の経験者もいて、子どもから高齢者・障害のある方の受け入れをして、世代間交流を目指している。（了）